控訴上告手續

C.Z
781
013

東京圖書館

函 四一	門 新
架 二	部 一一
號九〇〇五	類

甲ノ五　一本

明治八年六月十八日官許

控訴上告手續

長尾景弼編輯

東京愛宕下三丁目
博聞社

特39/817

C2
781
013

第九拾三號

今般大審院并二上等裁判所ヲ被置候ニ付控訴上告手續別冊ノ通相定候條此旨布告候事

明治八年五月二十四日　太政大臣三條實美

明治八年交付

内務省進刻局

東京帝國大學圖書館藏書 明治五年創設 MOMBUSHO 1872 HOUKIDENKY

第五章　控訴ノ事

第一條　凡ソ府縣裁判所ノ初審ニ服セスメ、再ビ上等裁判所ニ訴ヘ、覆審ヲ求ムル者、之ヲ控訴ト云

第二條　控訴ハ、民事ニ止マリ、刑事ニ及ハズ

第三條　控訴ハ、一タビスルヿヲ得、再タビスルヿヲ得ス

第四條　府縣裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ為シタル時、原告被告ノ雙方、又ハ一方ノ者、其裁判ニ不服

ナル時ハ、裁判言渡ヨリ第七日マデニノ裁判言渡翌日ヨリ數フ裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ、其翌日ニ至リ、控訴スルヿヲ得ベシ、但シ訴訟ノ案件、商事ニ係リ、急速ニ控訴スルヿヲ要スルノ場合ニ於テハ、七日内ト雖モ控訴スルヿヲ得、

第五條　府縣裁判所ノ裁判言渡ヨリ三箇月三十日ヲ以テ一月ヲ過ルヿハ控訴スルヿヲ許サス但シ府縣裁判所ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キヿハ期限三箇月ノ外、八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ增スベシ、

第六條　控訴ヲ爲ス者ハ、其初審ヲ受ケタル府縣裁判所ニ届ケ出ツ可シ但シ添翰ヲ乞フニ及バズ、

第七條　前條ノ届ヲ受ケ取リタル府縣裁判所ハ、裁判言渡ノ執行ヲ停止ス可シ、若シ上等裁判所ノ請求アル時ハ、府縣裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出ス可シ、

第八條　上等裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ、訴答文例ニ照準スベシ

第二章

上告總則ノ事

第九條　各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云フ

第十條　上告スルヿヲ得ルノ事件ハ

第一　裁判所管理ノ權限ヲ越エ

第二　聽斷ノ定規ニ乖ク

第三　裁判法律ニ違フ

第十一條　大審院ハ、上告ヲ受クルノ所ニメ、控訴ヲ受クルノ所ニアラズ、故ニ控訴スベキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ、之ヲ斥ケテ理セス

第十二條　陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ、之ヲ大審院ニ上告スルヿヲ得

第十三條　凡ソ上告シタル者、已ニ大審院ノ判決ヲ經レバ、更ニ訴フルヿヲ得ズ

第三章

民事上告ノ事

第十四條　民事ノ上告スルヿヲ得ル者ハ、已ニ上等裁判所ニ控訴シ、其審判ヲ經タル者ニ限ル、

第十五條　上告ヲ為サントト欲スル者ハ、裁判言渡ヨリ二月内ニ、直チニ上告狀正副二本ヲ大審院ニ捧クベシ、而メ同時ニ被告人ニ通知スルヲ要ス、大審院ヲ去ルノ距離八里ヨリ遠キ片ハ、二月ノ外、八里毎ニ一日ヲ增ス、定期ヲ過タル片ハ、上告スルヿヲ許サス、其上告狀ハ、原被告人ノ姓名貫籍、裁判ヲ得タル年月日ヲ記シ、上告ノ理趣ヲ明詳ニシ、及ビ原裁判ノ寫ヲ添フベシ、

第十六條　上告者ハ、其上告狀ニ添ヘテ、金拾圓ヲ大審院ニ預クベシ若シ其金高ヲ預ケザル片ハ、上告ヲナスヿヲ得ズ

第一　若シ上告ヲ取上ゲザル片ハ、其預リ金ヲ没入ス

第二　若シ上告ヲ取上ゲ、原裁判ヲ破毀シタル時ハ、預リ金ヲ還付ス

第三　若シ上告ヲ取上ゲ、被告人ト對審シタルノ

後之ヲ斥ケテ、原裁判ヲ破毀セザル時ハ、預リ金ヲ没入シ、又訴訟入費規則ニ照メ被告人ノ費用ヲ償ハシム、被告人トハ、上告者ノ相手方ヲ云

第十七條　上告ヲ為ス者ハ、先ツ原裁判所ニ届ケ出ツベシ、原裁判所ニ於テハ、書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スベシ、

第十八條　上告ニ付テハ、裁判ノ執行ヲ停メズ、大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レバ、即日、原裁判所ニ通報ノ、大審院ノ書記局ヨリ郵信ヲ發ス執行ヲ止メ、更ニ審判落着ノ日ニ至テ、前ノ執行ヲ取消メ、後ノ裁判ヲ執行セシムベシ

第十九條　上告狀ハ、原告人自ラ之ヲ捧グルモ、又ハ代言人ヲメ之ヲ捧ゲシムルモ、本人ノ意ニ任ス

第二十條　大審院ノ民事課ニ於テハ、判事列席ト列席ハ五人以上ヲ云以下之ニ倣ヘ延ニ臨ミ、原告人又ハ代言人ヲメ、上告狀ヲ讀上ケシメ、及陳述ヲ審聽シ、若當然ノ上告ナリト決スル時ハ、原被ノ對審ヲ為シタル上、判決スベキ旨ヲ言渡ス可シ、

第二十一條　判事審聽シ、若シ不當ナル上告ナリト決スル時ハ、何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セザル

ノ旨ヲ言渡スベシ、

第二十二條　第二十條ノ言渡ヲ為シタルノ後二日内ニ、大審院ヨリ被告人呼出狀ヲ仕出ス可シ、此ノ呼出狀ニハ、上告狀ノ副本ヲ添フベシ、

第二十三條　被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日内ニ、答辨書ヲ作リ、自身又ハ代言人ヨリ、之ヲ大審院ニ捧クベシ、但シ被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ片ハ、八里毎ニ一日ヲ增スベシ、

第二十四條　民事課ニテ被告人ノ答辨書ヲ受取リシ片ハ、課長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ專理員ヲ命シ、一件書類ヲ取纏メ、遲緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スベシ

第二十五條　原被對審ノ節ハ判事列席廷ニ臨ミ、最初ニ、專理員、一件始末ヲ宣讀シ、次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述、次ニ原被交互ノ論辨ヲ審聽シ、而メ後ニ原告人上告理アリト決スル片ハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スル二付

キ、更ニ其裁判所ニ於テ裁判ヲ受クベキ旨、又ハ大審院ニ於テ裁判スベキ旨ヲ言渡スベシ

第二十六條　若、原告人ノ上告理ナシト決スル片ハ、何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スベシ

第二十七條　大審院ノ破毀ニ因リ移ス所ノ裁判所亦タ大審院ノ旨ニ循ハザルヲ以テ、大審院ニ於テ合員會議ノ判決ヲ為ス時ハ専理員ヲ命ズルニ、必ズ刑事課ノ判事ヲ用フベシ

第四章　刑事上告ノ事

第二十八條　違警罪及死罪ヲ除クノ外、一切ノ刑事、皆上告スルヿヲ得

第二十九條　刑事ニ付キ上告スルヿヲ得ベキノ人

第一　囚人

第二　檢事（檢事無キノ地方ハ警察官之ニ代ルヿヲ得）

第三十條　上告ヲ為サント欲スル囚人ハ、裁判言渡ヨリ第三日迄ニ、（三日間ハ上告願狀ヲ其裁判所決行セズ）ノ書記局ニ捧ゲ、又第十日迄ニ、上告趣意明細書

ヲ作リ、同ク書記局ニ捧クベシ、

但シ書記局ハ決放ヲ執行スル所ノ地方官ニ其事ヲ達スベシ、

第三十一條　檢事ノ上告セントスル者ハ、裁判言渡ヨリ二十四時ノ内ニ、上告ヲ為スヿヲ囚人ニ達シ、又第十日迄ニ、上告趣意明細書ヲ作リ、之ヲ司法卿ニ遞送スベシ

但シ檢事ハ、上告ヲ為スヿヲ、決放ヲ執行スル所ノ地方官ニ通知スベシ

第三十二條　檢事及ビ、上告ノ期ヲ過ル時ハ、上告ノ權ヲ失フベシ

第三十三條　決放ヲ執行スル所ノ地方官ハ、囚人若クハ檢事ヨリ上告スルヿヲ達シタル時ハ、決行ヲ止メ、以テ上告ノ落着ヲ待チ、獄舍ニ於テハ、其囚人ヲ別舍ニ勾置スヿ可シ、（別舍ナキ者ハ、便宜ニ隨ヒ監護スレヲ要ス、）

第三十四條　囚人自ラ上告狀ヲ書記スルヿ能ハザル時ハ、代理人ヲ獄中ニ延キ、（獄中ヲ劃リテ應接所ヲ設ケ、它ノ囚人ト混ゼザルヲ要ス）上告趣意明細書ヲ代書セシムルヿヲ得其代理人ハ明細書ニ本人ト共ニ姓名ヲ記スヿ可シ、本人自ラ姓名ヲ記スルヿ能ハザルトキハ、其

事ヲ肩書スベシ

但シ代理人ヲ獄舍ニ延ク時ハ、之ヲ看守者ニ告ケ、看守者ハ之ヲ裁判所ノ書記局ニ届クベシ

第三十五條　囚人幼年（十五年未滿ヲ云）ニシテ、上告ヲ為スノ權利アルヿヲ知ラザル片ハ、其親族（五等親ヲ云）代リテ為メニ上告スルヿヲ得、

第三十六條　裁判所ノ書記局ニ於テ、上告趣意明細書ヲ受ケ取リタル時ハ其文書類ヲ并セテ、三日内ニ之ヲ大審院ニ遞送スベシ、

第三十七條　檢事上告スル時ハ上告趣意明細書及其文書類ヲ司法卿ニ遞送シ司法卿之ヲ大審院ノ檢事ニ付ノ大審院ニ原告セシム

第三十八條　大審院ノ刑事課ハ議事ヲ用ヒ、上告ヲ審按シ、上告不當、若クハ理ナシト決スル時ハ、理由ヲ付シタル判文ヲ原裁判所ノ書記局ニ發付シ、上告人ニ傳達セシメテ、後決行セシム、上告理アリト決スル時ハ原裁判ヲ破毀シテ、更ニ它ノ裁判所ニ移シ、若クハ大審院自ラ之ヲ審判スベキノ旨ヲ判シ、若クハ單ニ其ノ擬律ヲ平翻ノ、原

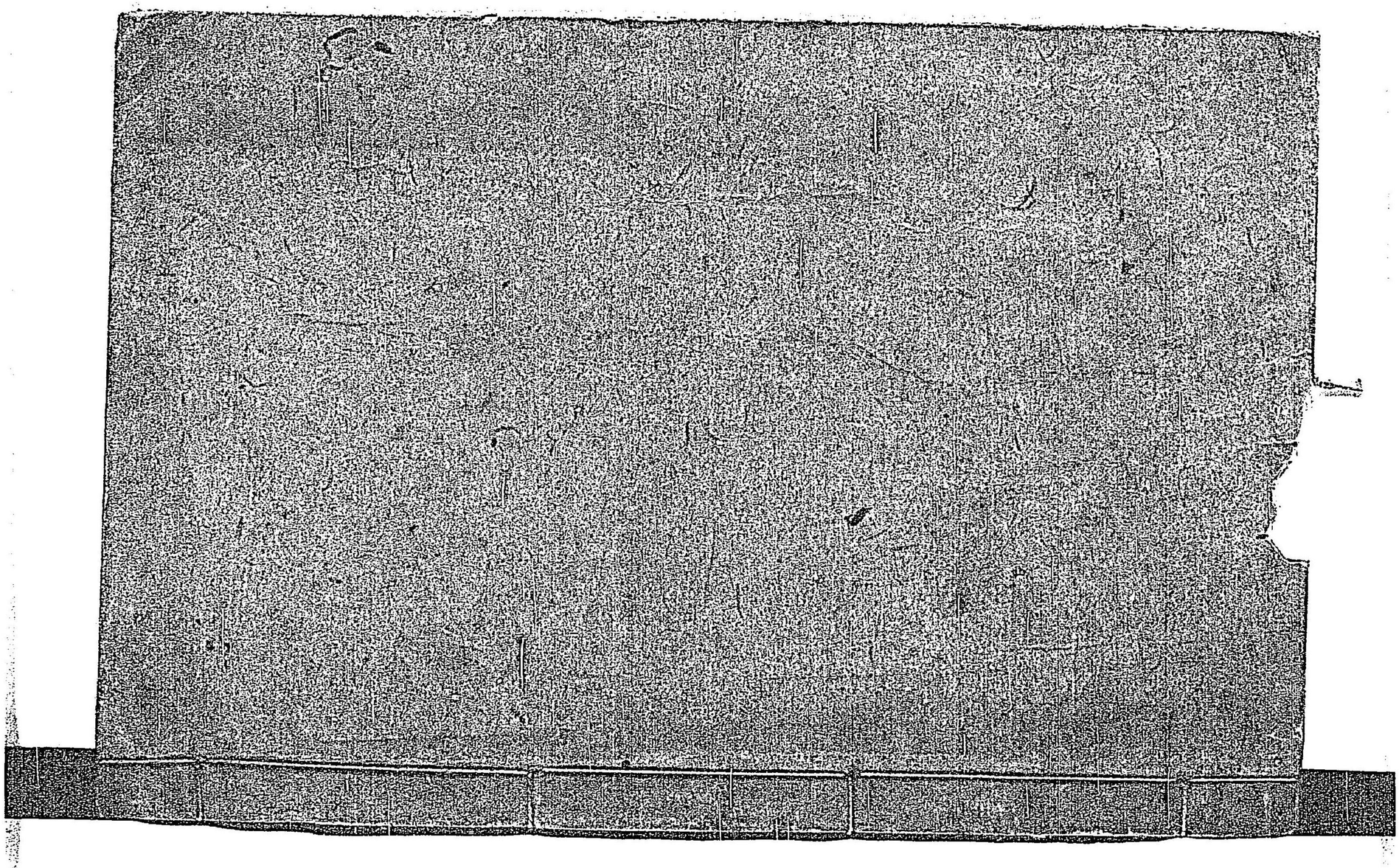
裁判所ノ書記局ニ發付シ處分セシム、其判文ハ
並ニ理由ヲ付スベシ

第三十九條　上告ノ檢事ヨリ出タル者ハ、判文ヲ大
審院ノ檢事ニ付シ大審院ノ檢事ヨリ司法卿ヲ
經由ノ原裁判所ノ書記局ニ下シ處行セシム

發行所

東京愛宕下町三丁目　博聞本社
西京古門前三吉町　同　分社
大坂心齋橋南久太郎町南江入　同　分社
千葉縣下本町二丁目　同　分社
東京新肴町　同　分社
同　常盤橋前　同　支店

賣弘所



控訴上告手續

C.Z
781
013

東京圖書館
新門 一四一函
一一部 二架
類 五〇九〇號

036757-000-9

CZ-781-013

控訴上告手続

博聞社

M8

BBS-0191